

金澤千古。德之所命。匪鼎匪石。人碑載硬。

文政六年冬十一月望前一日

七十八齡癡龍翁富田景周識

○金洗澤靈泉碑石

此の碑は、舊藩十三世正二位前中納言齊泰卿の建築にて、其の碑石はねぶ川と稱せる伊豆石なり。彫刻人は、江戸幕府の碑文彫田中文學と稱し、江戸谷中に居住し、其の頃高名なる良工也。故に金澤へ呼び下し、藩公より彫刻を命ぜられしと云ふ。右碑の題字金城靈澤の五字は、齊泰卿の親筆なり。

金城靈澤碑銘并叙

臣 津田鳳卿奉命撰

臣 波邊栗敬銘

臣 市河三亥謹書

北陸之鎮曰。白山。雪封其嶺而四時不盡。其峻逼霄。稱爲本邦三嶽之一。自古屬我藩管內。其麓跨五州。山派蜿蜒向北而來。至山崎莊而止。環匝三面。蒼海膺其前。中有龍蟠虎踞之都。元精鑿浮。鍾秀標瑞。具百二之形勢。實爲靖州

之雄鎮。先公比之金陵建業城。乃其名所由也。城內數百步有該寒泉。清而且漪。昔有逸人。稱曰藤五。採饒于山。淘汰斯水焉。故稱金澤。藤五爲人寡欲。好施不吝。蓋藤氏第五郎。避京洛之紛華。來棲邇於此。衣褐懷玉。遁名晦迹。不求人知。故前史無足徵者。天正中。我藩祖公自南越就封登州。三遷移鎮尾山。布維新之令。革舊染之俗。招賢任能。自西自東。士感而應之。民悅而歸之。自成郡邑。逮文祿元年。恢拓都城。民人益輻輳。皆樂其生。於是近取此水。以名都城。於是乎金澤之名。昉聞于天下。迨前朝時。因營菟葵。池在其苑園中。咫尺新殿。爰感建都之古蹟。仰祖公之創業。託物存思。乃錫嘉號曰金城靈澤。竊比隆於有周之治。今公承統。理化休明。能繼先旨。命臣三亥大書其榜。又命臣鳳卿。叙述其事。臣栗敬之銘詞。乃令勒石建之于池上。加以公親筆題額。於是勝蹟不朽千古矣。抑斯水也。其聲知於一个逸民。遂被明主之顧。發名於文祿。錫號於文政。樹碑於天保者。以其密邇雄都而遭遇右文之時也。雖然涓々一澗之水。而被皇々親筆之榮。寵異至此。固不期而遇。不求而致者。豈非有數而存焉者乎。且數百年之前。誰

知有今日之事。至數百年之後。永依託雄都。以與國並傳。又徵以斯文。則誰不知人以池傳迹。池亦因城託名。豈是皆賴明主之一舉。而三善皆顯哉。果然則勝蹟。眞是不朽無疑矣。臣材樛且老。固不足以應盛旨。敢陳愚衷。以寓景仰之意。臣栗敬以銘曰。

府城之南。橙泉洋溢。茲圃爲澤。克育萬物。滋潤膏沃。涵養無竭。盈科而進。成章以達。豈同溝澮。雨集皆盈。厥實深厚。粵得美名。君子所法。君道以享。遺澤流渥。黎庶遂生。休哉君德。日昭月明。

天保十五年歲次甲辰正陽月

○鳳 風 山

此の山は、靈泉の傍なる丘山にて、此の丘山の麓なる抗に碑を建てたり。此の丘山は、舊藩主中將齊廣卿竹澤殿造營の頃築かれしにや。其の後數十年葎生ひ茂り、殊に竹林の爲に築山の体を失へり。然るを近く神職葎を刈取り、竹林を伐り拂うて復古なしたり。或は曰ふ。右鳳風山は、竹澤殿の時新に築かれたるにはあらず。元よりの小丸山なりしを、怪巖奇石を以て修築せられ、鳳風山と名付けられたり

といへり。今按するに、加邦錄に、横山左衛門の屋敷内なる山下の清水是即ち金澤なりと見たれば、元祿以前此の地横山氏の第内なりし頃より存在せし小丸山なる事知られけり。さて其の山狀稍、鳳風に彷彿たるを以て、鳳風山と呼ばしめられしと聞ゆ。

○芋掘藤五郎傳話

金澤紀中に云ふ。人碑之所載。州初有先民藤五郎。長者也。將軍藤原利仁之流裔云。清原寡欲。不言人短。聞其所長。奮袂并俛。嚮薯蕷劣餽。口。有時而無突烟。抱絕粒之枵腹。或衣敗露。經默晏如。一鄉比屋傾。意懷陰陽。一日鑿峽山得金沙巨萬。而漉之一靈澤。躬自蓄牛犢。餘盡散賑郵窮民。乃金澤嘉名自是昉矣。云々。夫將軍延喜中人。距今九百許年。五郎爲其流裔。則距將軍。覺粗未可過百年上下。然則雖不得明證。大約澤名所濫觴。應在長德。長保將軍四世孫州牧富樫忠頼之代間歟。云々。と記載し、三州志來因概覽には、相傳ふ。古へ當國石川郡山村村に藤五郎と號せる道人あり。加賀介藤原吉信の末裔たりと云ふ。薯蕷を掘りて采り、之を市に鬻ぎて一身の主計となす。故に時の人芋